

### 介護実習における学生の不安 (3)

－ 介護実習不安尺度の因子構造と 2 年間の時系列変化 －

#### Students' Anxiety when Related to Care-work Practice (3) :

Factors of Anxiety Scale for Care-work Practice and Their Successive Changes over Two Years

柗崎京子\*

Kyoko Fukizaki,

田中秀明\*\*

Hideaki Tanaka

中野いずみ\*\*\*

Izumi Nakano

戸澤由美恵\*\*\*\*

Yumie Tozawa

#### 要約

本研究では、2年制介護福祉士養成課程の学生を対象とした柗崎ら<sup>9)</sup>による「不安についての質問項目（介護実習不安尺度）」について、その因子構造を明らかにした。被調査者は本学2000年度・2001年度入学生150名であった。因子分析の結果、4因子による下位尺度（①職員との関係・実習遂行に関する不安、②介護技術・実践に関する不安、③実習記録に関する不安、④利用者理解・配慮に関する不安）が構成され、それらは高い内的一貫性を示していた。得られた4下位尺度を用いて、本学における2年間の計4回の介護実習を対象に、各実習前の不安の時系列変化について検討した。被調査者は本学2000年度入学生64名である。その結果、4下位尺度とも実習回数が増すごとに不安が低減していくという傾向が認められた。またそれらを実習分野別に詳細に検討してみたが、特に違いや関連性はみられないようであった。

キーワード：介護実習 実習不安 介護実習不安尺度 因子構造 時系列変化

---

\*社会福祉学専攻 \*\*児童福祉学専攻 \*\*\*社会福祉学専攻 \*\*\*\*社会福祉学専攻

## I. 問題と目的

介護実習は、介護福祉士養成課程で学ぶ学生が介護福祉士登録資格を取得するための必修要件である。指定養成施設・2年制以上における介護実習は、厚生省法令・通知により①実習施設の指定化（施設介護実習と訪問介護実習）、②450時間、③3段階構成という指定基準が示されている。2002年4月現在、指定養成施設448のうち、2年制以上は86.5%（1年制13.4%）を占めるが、このうち70.2%は短期大学や専門学校などの2年制であり、多くの養成校が短期間に長期にわたる実習を行っているのが特徴である（4年制6.0%、3年制10.3%）。

2年という短期間での専門教育という現養成教育における一般的な特徴は、十分な専門的教育や学生個々の状況にあわせた教育を行う上での限界・制約として語られることがしばしばある。しかし、介護福祉士養成教育における介護実習は、既に学んだ知識・技術を実習体験を通し統合するという目的や、専門的職業者としての理解力・判断力や介護技術能力の醸成等の意義をもって展開されており、こうした目的・意義を達成するための効果的な指導方法が課題となっている。また、指導体制については、学内における「実習指導（90時間、2年制以上）」や実習先への巡回指導の義務付け、実習現場における実習指導者要件が指定基準で示されているが、体系的な実習指導プログラム及び指導内容・方法は未だ模索段階にあるといえる。

実習の最も大きな特徴は、実習が学外における体験学習という学習形態であり、介護サービスの提供現場で実際にサービス利用者に介護者として関わることにある。決められた一定期間、未知の環境に自己を適応させながら実習目標や実習記録に取り組むことは学生にとって強いストレスとなる。そのため、実習に対して学生が不安（心配）・緊張を感じることも少なくない。実習における不安については既に様々な方法で多くの研究がなされているが、これらはいずれも実習が有効な学習となるよう指導方法を模索するために教育上の活用を意図して実施されている<sup>1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8)</sup>。しかしこれらの研究は看護・社会福祉士実習を対象としたものがほとんどであり、介護実習を対象にしたものも不安の内容抽出に主眼を置いたものではない。そこでこれまでに我々は、学生がごく日常的に感じている不安の内容を学生自身の言葉を出発点にしてできるだけ網羅して把握することが必要であると考え、「実習前に不安に感じていること」を本学における実習目標の主要項目に沿って学生に自由記述させる予備調査を行い、その結果から得られた不安内容213個を『不安についての質問項目』90項目（以下、「介護実習不安尺度」）として整理した<sup>9)</sup>。

上記の「介護実習不安尺度」は本学学生のデータによるものであるが、実習の指導内容・方法についての検討、あるいは学生の準備学習や実習環境を整えるための実践的意義の点からみると、2年制で行う介護実習の特徴を一定程度反映していると考えられる。し

かしながら項目数が多いため回答者への負担があるなど、有用性そのものに対する問題がある。また、この尺度は因子構造が明らかにされていない。そこで、本研究では、柗崎ら<sup>9)</sup>による介護実習不安尺度の因子構造を明らかにすることを第一の目的とする。

実習は教育期間の中で継続的に行われるものであり、実習回数が増えるに従い学習の深化や経験の影響を受け、介護実習不安は変化すると予測できる。よって本研究では、得られた因子分析結果を用いて、本学における4回の介護実習(表1参照)を対象に、介護実習不安の時系列変化を検討することを第二の目的とする。また、本学における初めての実習を対象にした我々の先行研究においては、障害者分野で実習する学生の方が高齢者分野で実習する学生よりも不安が高い傾向にあり、介護実習不安は実習分野の影響を受けることも示唆されている<sup>10)</sup>。しかしこの段階では、介護実習不安尺度の各項目について比較・検討したのみであるので、実習分野別による不安の時系列変化についても検討することとした。

表1 本学における介護実習の構成と特徴

年次	実習段階	実習名	時期・時間数	実習形態	介護実習施設(及び実習分野)
1年	第1段階	実習ⅠA	7月 88時間	集中	施設介護実習(aクラス:障害児者 bクラス:高齢者)
		実習ⅠB	2月 88時間	集中	施設介護実習(aクラス:高齢者 bクラス:障害児者)
2年	第2段階	実習Ⅱ	5~6月 120時間	集中(40時間)+定例(80時間)	施設介護実習(実習Ⅱ・Ⅲは同一施設で実習)
	第3段階	実習Ⅲ	9月 168時間	集中(128時間)	*実習分野は学生の選択により決定
				集中(40時間)	訪問介護実習

## II. 方法

### (1) 被調査者

介護福祉士養成課程である本学社会福祉学専攻の2000年度入学生71名および2001年度入学生79名の計150名(男子18名、女子132名)を介護実習不安尺度標準化のための被調査者とした。年齢範囲は18歳から37歳であり、平均18.64歳であった。なお、短大生活2年間での計4回の介護実習における介護実習不安の時系列的分析を行う被調査者は、2000年度

表2 調査時期及び対象者(調査1~4に全て回答した64人について)

調査		調査1	調査2	調査3	調査4
調査時期		2000.6.28~29	2001.1.17~23	2001.5.9	2001.7.19
対象となる実習	実習段階(実習名)	第1段階(実習ⅠA)	第1段階(実習ⅠB)	第2段階(実習Ⅱ)	第3段階(実習Ⅲ)
	実習時期	2000.7/3~7/14 のうちの計11日間	2001.2/5~2/16 のうちの計11日間	2001.5.14~6.23 のうちの計15日間	2001.9.3~9.28 のうちの計16日間
	実習分野	高齢者者分野:34人 障害児者分野:30人	高齢者者分野:30人 障害児者分野:34人	高齢者者分野:42人 障害児者分野:22人	
対象者の概要	人数	64人		64人	
	性別(男/女)	6/58人		6/58人	
	平均年齢	18.98才(18~37才) /2000.7.1月現在		19.98才(19~38才) /2001.7.1月現在	

注) 調査4の対象となる実習は、実習Ⅲにおける「施設介護実習」のみであって「訪問介護実習」は含まない。

入学生のうち4回全ての調査に回答した64名（男子6名、女子58名）がその対象である（表2参照）。

## (2) 調査内容

袴崎ら<sup>9)</sup>による介護実習不安尺度を使用した。原尺度は90項目から成る質問紙であるが、今回は実習第1段階である介護実習ⅠAおよびⅠBでは非該当の項目となる10項目（No.50～59）を除いた計80項目を使用した。各項目に対する回答形式は「非常に強くある」「かなりある」「少しある」「ない」の4段階評定であり、不安傾向が強いほど高得点となるよう各々4、3、2、1点と得点化した。

## (3) 手続き

各介護実習（介護実習ⅠA、ⅠB、Ⅱ、Ⅲ）開始前の必修授業に出席した学生に対し、クラス単位で集団実施した。なおⅠA、ⅠB、Ⅱについてはおよそ実習5～10日前、Ⅲのみ実習自体が夏休みの後半に行われるため、前期授業終了直前に調査を実施した。したがって厳密に言えば、介護実習Ⅲについては約1ヶ月前の時点での不安ということになる。

## Ⅲ. 結果

### (1) 介護実習不安尺度の因子構造について

介護実習不安尺度の因子構造を明らかにするために、2000年度ならびに2001年度の介護実習ⅠA時の被調査者（n=150）の回答に基づき、主因子法、バリマックス回転による因子分析を施した。

固有値の減衰状況を見たところ、28.75、4.01、2.92、2.50、2.15……であり、固有値間のギャップは第1因子と第2因子の間にあると考えられるが、項目数の多さとバリマックス回転後の解釈可能性を考えて、一応3因子から11因子を抽出し、それぞれに対してバリマックス回転を施してみた。その結果、因子の解釈が比較的うまくできる4因子解を採用することにした。各因子に.40以上の因子負荷量を示す項目を当該因子の構成項目として残すこととし、4つの因子全てに負荷量が.40以下となった項目を削除していった。このような手順を繰り返すことで計3度の因子分析を行い、最終的には71項目が残された。バリマックス回転後の因子負荷量と各項目に対する平均および標準偏差は表3に示されている。因子負荷量に関して言えば、いずれの項目もいずれかの因子に.40以上の負荷量を示していることが理解できよう。

第1因子は寄与率が17.69%で、No.66「失敗したときに職員に冷たくされそうでこわい」やNo.60「職員が嫌がったり、面倒くさがらずに指導してくれるだろうか」、No.61「困って

表3 介護実習不安尺度の因子分析結果 (n=150)

変数名	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性	平均値	標準偏差
<b>「職員との関係・実習遂行に関する不安」因子 (α=.96)</b>							
66 失敗したときに職員に冷たくされそうでこわい	0.75	0.33	0.09	0.09	0.69	2.76	1.08
60 職員が嫌がったり面倒くさがらずに指導してくれるだろうか	0.72	0.14	0.04	0.12	0.55	2.84	0.97
61 困っているときに職員からアドバイスしてもらえるか心配だ	0.71	0.21	0.11	0.03	0.56	2.81	0.94
72 職員から嫌われたり、避けられたりしたらどうしよう	0.68	0.34	0.24	0.08	0.65	2.89	1.02
64 自分から積極的に職員に助けを求められるだろうか	0.68	0.21	0.18	0.38	0.68	2.95	0.95
62 困っているときに自分から職員に話ができるか心配だ	0.68	0.15	0.24	0.24	0.60	2.55	0.99
65 職員とコミュニケーションをとって、うまくやっけていけるだろうか	0.67	0.18	0.23	0.34	0.66	2.89	0.97
68 注意されたら落ち込んだり、その職員を避けてしまいたいそう	0.66	0.12	0.28	0.28	0.61	2.43	1.00
76 求められる介護職員の役割について理解できるだろうか	0.66	0.34	0.27	0.14	0.64	2.81	0.85
63 職員の視線が気になって思うように動けないかもしれない	0.64	0.17	0.20	0.20	0.52	2.73	0.96
78 福祉機器や物品の使い方がわかるだろうか	0.64	0.22	0.19	0.07	0.49	3.06	0.84
67 仕事が遅くて職員に迷惑がられてしまいたいそう	0.62	0.29	0.18	0.18	0.53	3.07	0.92
82 実習課題の実践に職員の理解・支援が得られるだろうか	0.61	0.20	0.41	0.19	0.62	2.75	0.83
74 実習先の職員の仕事の流れを把握できるだろうか	0.61	0.29	0.34	0.11	0.59	2.87	0.84
69 職員に言われたことや専門用語が理解できないかもしれない	0.61	0.24	0.38	0.05	0.58	2.88	0.83
71 職員の指示ややり方がそれぞれ違っていたらどうしたらよいのか	0.61	0.27	0.30	0.10	0.55	2.97	0.92
75 実習先の社会的役割、運営について理解できるだろうか	0.61	0.38	0.26	0.07	0.59	2.77	0.84
70 職員の指示に対して、ときどき動けるだろうか	0.56	0.30	0.19	0.32	0.54	3.15	0.88
73 自分の行く実習施設について事前に十分理解していないので不安だ	0.53	0.05	0.43	0.11	0.49	2.83	0.87
85 利用者の急変・事故にあたるかもしれない	0.52	0.32	0.27	0.06	0.45	2.63	1.03
77 短期間で部屋や物品がしまっている場所など細かいことまで覚えられないかもしれない	0.52	0.29	0.24	0.27	0.48	2.93	0.87
79 実習課題を達成できるかどうか不安だ	0.51	0.21	0.33	0.22	0.46	3.07	0.83
86 実習生の立場で、どこまで援助してよいのかわからない	0.48	0.20	0.37	0.28	0.49	2.93	0.88
81 その時その時の行動が精一杯になって、実習課題や目標を意識して取り組めるだろうか	0.46	0.24	0.33	0.33	0.49	3.18	0.80
43 経験したことを次に活かせるだろうか	0.42	0.36	0.39	0.10	0.47	2.97	0.82
<b>「介護技術・実践に関する不安」因子 (α=.95)</b>							
34 自分が介助をすることで利用者に苦痛を与えてしまいたいそうで心配だ	0.24	0.73	0.13	0.25	0.67	3.21	0.81
31 利用者の残存能力を活かした介助ができるか不安だ	0.22	0.71	0.33	0.01	0.67	3.07	0.87
33 自分が介助をすることで利用者を不快にさせてしまいたいそうで心配だ	0.23	0.70	0.12	0.33	0.67	3.27	0.81
18 入浴を楽しんでもらえる心配りができるか不安だ	0.19	0.66	0.21	0.15	0.54	2.93	0.85
24 利用者が安心して身をまかせてくれる移動・移乗介助ができるだろうか	0.24	0.65	0.07	-0.07	0.49	3.22	0.80
27 腕や足が拘縮したり、麻痺した人の着脱がちゃんとできるだろうか	0.24	0.64	0.29	0.05	0.56	3.23	0.78
30 その人にあった、その人が望む介助ができるだろうか	0.29	0.63	0.33	0.21	0.63	3.20	0.81
36 利用者にケガをさせてしまいたいそうでこわい	0.32	0.63	0.32	0.01	0.60	2.91	0.89
17 入浴介助が安全にできるだろうか	0.20	0.62	0.13	0.08	0.45	3.29	0.79
6 利用者が自分を受け入れてくれるか不安だ	0.21	0.61	-0.12	0.32	0.53	3.44	0.80
25 移動・移乗介助中にバランスをくずしたり、転倒したりするのではないかとこわい	0.30	0.61	0.12	0.09	0.48	3.11	0.89
28 自分が介助することを利用者に拒否されたらどうしよう	0.23	0.60	0.04	0.30	0.51	3.48	0.76
32 利用者ができることまでやってしまいたいそう	0.18	0.57	0.23	0.12	0.43	2.93	0.87
29 利用者のプライバシーを配慮した介助ができるだろうか	0.28	0.56	0.25	0.14	0.47	3.03	0.85
40 失敗したら次から利用者に介助をさせてもらえないのではないだろうか	0.42	0.56	0.13	0.20	0.55	3.27	0.83
26 利用者の好みにあった身だしなみを手伝えるだろうか	0.27	0.56	0.34	0.17	0.52	2.60	0.85
16 利用者を誤嚥させてしまいたいそうでこわい	0.23	0.55	0.18	0.29	0.48	3.13	0.85
12 言語障害のある人とうまくコミュニケーションがとれるか心配だ	0.23	0.51	0.18	0.21	0.39	3.31	0.79
8 触れられたくないことまで利用者に向けてしまうのではないか	0.29	0.50	0.09	0.08	0.35	2.57	0.91
3 利用者の心身の障害の状態を早くつかめるか心配だ	0.21	0.50	0.26	0.35	0.49	2.95	0.79
5 利用者がどんな介助を必要としているか理解できるだろうか	0.14	0.49	0.20	0.35	0.42	3.18	0.72
15 食事介助がうまくできるだろうか	0.23	0.48	0.10	0.27	0.37	2.89	0.94
23 おむつ交換の手順が悪く、時間がかかってしまいたいそうで不安だ	0.30	0.46	0.16	0.15	0.35	3.60	0.66
14 利用者が深刻な話をした時、どう対応したらよいか心配だ	0.17	0.46	0.34	0.36	0.49	3.03	0.82
39 介助を失敗した時どう対応したらよいか心配だ	0.44	0.46	0.14	0.23	0.48	3.35	0.80
37 介助に夢中で、声かけや気配りを忘れてしまいたいそうだ	0.21	0.44	0.27	0.34	0.43	2.95	0.88
38 利用者から「介助がへた」と思われたいか心配だ	0.35	0.41	0.32	0.13	0.41	3.18	0.90
<b>「実習記録に関する不安」因子 (α=.93)</b>							
45 たくさん書いて用紙を埋められるだろうか	0.23	0.04	0.86	0.04	0.79	2.76	0.98
46 自分が感じたことや考えたことを文章にまとめられるだろうか	0.15	0.16	0.83	0.12	0.75	2.73	0.99
44 記録を決められた時間内(期限内)に書いて出せるだろうか	0.16	0.11	0.81	0.11	0.70	2.65	1.00
49 実習を振りかえり、感想文でない考察が書けるだろうか	0.22	0.21	0.80	0.16	0.76	2.93	0.88
47 記録用紙の項目にあった書き方ができるだろうか	0.28	0.28	0.79	0.04	0.79	2.69	0.86
48 実習でやったことや会話などを覚えて書いて書けるだろうか	0.23	0.21	0.73	0.21	0.66	2.73	0.92
80 「毎日の目標」を設定して実習できるだろうか	0.47	0.18	0.47	0.32	0.58	2.89	0.85
<b>「利用者理解・配慮に関する不安」因子 (α=.89)</b>							
20 排泄物を目の前にしたら気が動転してしまいたいそう	0.23	0.07	0.12	0.68	0.53	2.77	0.98
10 利用者とはどんな話をしたらよいかわからない	0.21	0.30	0.08	0.62	0.52	2.94	0.93
4 言葉で表現していない気持ちを理解できるだろうか	0.19	0.32	0.23	0.57	0.51	3.43	0.69
90 とにかく実習が不安なので、それが表情・態度に出てしまうかもしれない	0.34	0.28	0.26	0.57	0.59	2.96	1.06
21 排泄物がくさくてイヤな顔をしてしまわないか不安だ	0.25	0.22	0.21	0.52	0.42	2.71	1.01
1 利用者の訴えや思いを理解できるか不安だ	0.18	0.43	0.26	0.51	0.55	3.14	0.83
19 異性の排泄介助を抵抗なくできるだろうか	0.31	0.12	0.09	0.51	0.37	3.41	0.87
2 利用者の生活状況(生活環境、生活習慣、QOL)を理解できるか不安だ	0.07	0.39	0.37	0.50	0.54	2.85	0.80
9 どんな利用者にも自分から話しかけられるだろうか	0.25	0.24	0.09	0.49	0.37	2.81	1.01
7 施設の雰囲気や方針が嫌になり、実習を続けることがつらくなるかもしれない	0.36	0.00	0.25	0.49	0.43	2.25	1.03
8 自分の関わりで利用者を不快にさせないか不安だ	0.20	0.45	0.04	0.49	0.48	3.31	0.76
83 心身のコンディションを整えて実習に臨めるだろうか	0.41	0.02	0.37	0.42	0.48	2.57	1.02
2 乗和	12.56	11.68	7.95	5.98			
寄与率 (%)	17.69	16.45	11.20	8.42			

いるときに職員からアドバイスしてもらえるか心配だ」などの項目に高い負荷量が示されていることから、「職員との関係・実習遂行に関する不安」因子と命名した。第2因子は寄与率が16.45%で、No.34「自分が介助をすることで利用者に苦痛を与えてしまいそうで心配だ」やNo.31「利用者の残存能力を活かした介助ができるか不安だ」、No.33「自分が介助をすることで利用者を不快にさせてしまいそうで心配だ」などの項目に高い負荷量が示されていることから、「介護技術・実践に関する不安」因子と命名した。第3因子は寄与率が11.20%で、No.45「たくさん書いて用紙を埋められるだろうか」やNo.46「自分が感じたことや考えたことを文章にまとめられるだろうか」、No.44「記録を決められた時間内(期限内)に書いて出せるだろうか」などの項目に高い負荷量が示されていることから、「実習記録に関する不安」因子と命名した。第4因子は寄与率が8.42%で、No.20「排泄物を目の前にしたら気が動転してしまいそう」やNo.10「利用者とはどんな話をしたらよいかわからない」、No.4「言葉で表していない気持ちを理解できるだろうか」などの項目に高い負荷量が示されていることから、「利用者理解・配慮に関する不安」因子と命名した。なお、4つの因子による累積寄与率は53.76%となり、若干低い因子解釈の点からは妥当なものとは判断される。よって、以後はこの4つの因子によって下位尺度を構成し、分析を進めることとした。

なお、これら4つの下位尺度について、2000年度と2001年度の学生の比較を行ってみたところ、第2因子である「介護技術・実践に関する不安」において5%水準の有意差が認められ( $t [148] = 2.21, p < .05$ )、2000年度の学生の方が高かった(2000年度の平均は87.18、2001年度は81.76)。それ以外の3つの下位尺度については、有意な学年差は認められなかった。したがって、全体的な傾向として見る限り、本尺度は年度の違いなど調査対象となるサンプルが異なっても、それほど大きな変動が生じることのない比較的等質性の高い尺度であることが明らかにされた。

各下位尺度の平均と標準偏差は表4に示されている。因子毎に項目数がかなり異なるため、4つの下位尺度の平均についてそれぞれの下位尺度項目数で割り、大まかな1項目当たりの平均を算出してみた。その結果、「職員との関係・実習遂行に関する不安」「介護技術・実践に関する不安」「実習記録に関する不安」「利用者理解・配慮に関する不安」という4つの下位尺度は順に、2.87、3.12、2.77、2.93であった。すべてにおいて比較的高いと言えるが、なかでも「介護技術・実践に関する不安」についてはかなり高い不安傾向を呈

表4 介護実習不安尺度の平均、標準偏差と下位尺度間の相関係数 (n=150)

	M	SD	②	③	④
①職員との関係・実習遂行に関する不安	71.85	16.54	.75**	.66**	.72**
②介護技術・実践に関する不安	84.33	15.17		.57**	.72**
③実習記録に関する不安	19.37	5.46			.57**
④利用者理解・配慮に関する不安	35.14	7.39			

\*\*p<.01

していることが理解できる。また、各下位尺度間の相関係数は表4に示されているが、それによると $r=.57\sim.75$ といずれも高く、すべて1%水準で有意であった。4つの下位尺度は相互にかなり強く結びついているといえよう。

次に、介護実習不安尺度の信頼性をみるために、下位尺度ごとに内的一貫性の指標であるクロンバックの $\alpha$ 係数を算出した。結果は表3に示されている。 $\alpha$ 係数の値は.89～.96にあり高かった。一般的に $\alpha$ 係数は、0.7程度以上あれば内的一貫性が保持されていると考えられていることから、各下位尺度の信頼性は一応保持されていると判断される。

最後に、本分析の対象となった実習 I A の時点における4つの下位尺度について、実習分野（高齢者施設 [n=78] ならびに障害者施設 [n=72]）による不安の差異について検討した。その結果、すべての下位尺度に有意差が認められ、いずれも障害者施設で実習をする学生の方が高かった（職員との関係・実習遂行に関する不安 [高齢者施設の平均67.54、障害者施設の平均76.51] :  $t [148] = 3.43$ ; 介護技術・実践に関する不安 [高齢者施設の平均80.89、障害者施設の平均88.06] :  $t [148] = 2.96$ ; 実習記録に関する不安 [高齢者施設の平均18.06、障害者施設の平均20.79] :  $t [148] = 3.14$ ; 利用者理解・配慮に関する不安 [高齢者施設の平均32.27、障害者施設の平均38.25] :  $t [148] = 5.38$ 、いずれも、 $p < .01$ ）。初めての实習である「介護実習 I A」の時点において、障害者施設で実習を行う学生の方が高齢者施設で実習を行う学生よりも不安が高いという傾向は、2000年度の学生のみを対象とした戸澤ら<sup>10)</sup>でも確認されており、これは本専攻の全体的傾向であると考えられよう。

## (2) 介護実習不安の時系列変化について

2000年度入学生のうちすべての調査に回答した64名を対象に、短大生活2年間における計4回の実習不安の時系列変化について検討した。分析にあたり、まず各測定時期にお

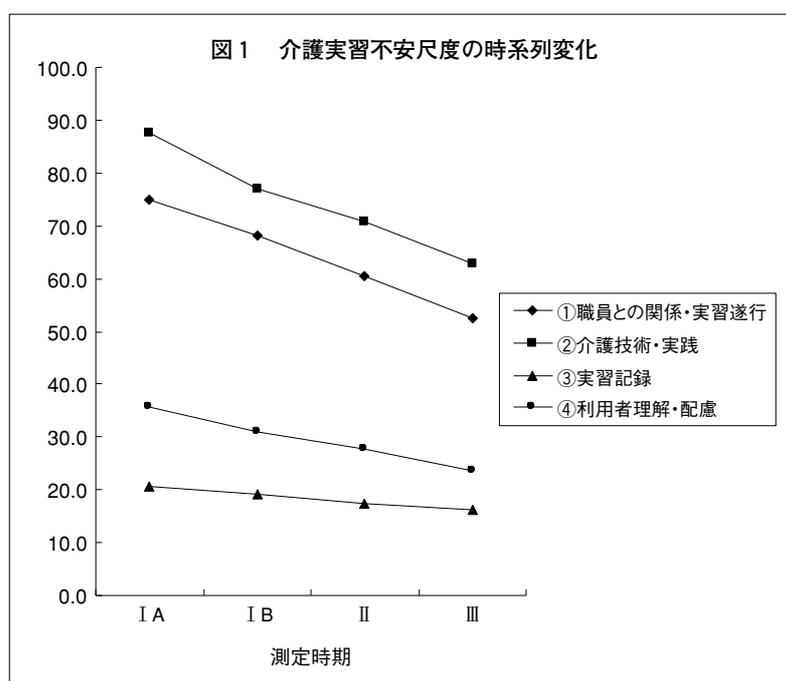
表5 介護実習不安尺度の測定時期ごとの $\alpha$ 係数、平均値、標準偏差と分散分析結果 (n=64)

	介護実習 I A	介護実習 I B	介護実習 II	介護実習 III	F値
①職員との関係・実習遂行に関する不安	74.88 (17.12) $\alpha = .96$	68.00 (14.04) $\alpha = .96$	60.59 (14.33) $\alpha = .96$	52.64 (12.60) $\alpha = .95$	60.11**
	I A > I B > II > III * 注)				
②介護技術・実践に関する不安	87.65 (13.10) $\alpha = .94$	76.98 (13.84) $\alpha = .96$	70.86 (13.38) $\alpha = .94$	62.77 (13.14) $\alpha = .95$	90.63**
	I A > I B > II > III *				
③実習記録に関する不安	20.63 (5.52) $\alpha = .93$	19.22 (5.97) $\alpha = .94$	17.28 (5.63) $\alpha = .94$	16.36 (5.35) $\alpha = .92$	14.63**
	I A, I B > II, III *				
④利用者理解・配慮に関する不安	35.77 (7.07) $\alpha = .87$	31.08 (5.73) $\alpha = .84$	27.64 (6.24) $\alpha = .86$	23.59 (5.17) $\alpha = .84$	107.46**
	I A > I B > II > III *				

\*\* $p < .01$ 、\* $p < .05$ 、カッコ内は標準偏差を示す。注) は測定時期の多重比較を示す。

る4つの下位尺度の $\alpha$ 係数を算出してみたところ、 $\alpha$ 係数は.84～.96の範囲にあり高い内的一貫性が示されていた(表5参照)。

(1) で得られた4下位尺度について、測定時期(介護実習I A、I B、II、III)を要因とする1要因の分散分析を行った(表5および図1参照)。その結果、すべての下位尺度について測定時期の主効果がみられた(職員との関係・実習遂行に関する不安:F [3,189] =60.11; 介護技術・実践に関する不安:F [3,189] =90.63; 実習記録に関する不安:F [3,189] =14.63; 利用者理解・配慮に関する不安:F [3,189] =107.46、いずれも、 $p<.01$ )。LSD法による多重比較の結果、いずれにおいても5%水準以上の有意差がみられ、特に「職員との関係・実習遂行に関する不安」「介護技術・実践に関する不安」「利用者理解・配慮に関する不安」については実習回数が増すことによって有意に不安が低減していくという単方向的漸次的傾向(介護実習I A > I B > II > III)が確認された。「実習記録に関する不安」については、実習第2段階の介護実習IIおよび第3段階である介護実習IIIの得点が、実習第1段階の介護実習I AおよびI Bの得点に比べて有意に低かった。



次に、さらにこうした時系列変化についての傾向を詳細に検討するため、上記学生について4回の実習先をその選択した実習分野(高齢者施設か障害者施設か)ごとに分け、選択コースによる不安の変化について検討した。なお、介護実習I A・I Bにおいては高齢者施設と障害者施設のどちらか一方を選択し両施設での実習を行うこと、介護実習IIとIIIは同じ種別の施設を選択するため、その選択コースはI AからIIIまで順に「高齢者施設→障害者施設→高齢者施設→高齢者施設」「高齢者施設→障害者施設→障害者施設→障害者施設」「障害者施設→高齢者施設→高齢者施設→高齢者施設」「障害者施設→高齢者施設→障害者施設→障害者施設」という4つが見出された。

この4つのコースの違いによる各下位尺度の時系列変化の差異について検討するために、下位尺度ごとに選択コースおよび測定時期を要因とする4×4の2要因の分散分析を行った(表6および図2～5参照)。その結果、すべての下位尺度において測定時期の主

表 6 4つのコースによる介護実習不安尺度の測定時期ごとの平均値, 標準偏差

	介護実習 I A	介護実習 I B	介護実習 II	介護実習 III
①職員との関係・実習遂行に関する不安				
コース 1 (n=15)	73.33 (15.77)	62.53 (12.23)	55.33 (11.34)	8.80 (10.55)
コース 2 (n=19)	71.05 (18.52)	71.84 (14.62)	62.37 (15.84)	51.68 (12.09)
コース 3 (n=27)	79.07 (14.98)	69.30 (11.72)	63.30 (13.29)	55.96 (13.55)
コース 4 (n= 3)	69.00 (22.86)	59.33 (23.11)	51.33 (15.76)	48.00 (7.26)
②介護技術・実践に関する不安				
コース 1 (n=15)	87.67 (12.53)	73.87 (13.23)	64.80 (13.39)	59.27 (15.39)
コース 2 (n=19)	86.74 (14.65)	75.79 (15.62)	71.53 (12.90)	60.16 (9.76)
コース 3 (n=27)	88.44 (12.67)	80.44 (11.46)	74.70 (12.47)	67.11 (13.26)
コース 4 (n= 3)	86.33 (7.54)	69.00 (15.90)	62.33 (8.65)	57.67 (3.68)
③実習記録に関する不安				
コース 1 (n=15)	18.40 (4.73)	16.47 (4.80)	15.87 (4.49)	14.60 (5.41)
コース 2 (n=19)	20.00 (5.89)	20.10 (6.46)	17.53 (5.53)	18.05 (4.26)
コース 3 (n=27)	20.96 (5.30)	20.22 (5.52)	18.04 (6.01)	16.30 (5.66)
コース 4 (n= 3)	20.67 (6.60)	18.33 (7.36)	16.00 (5.72)	15.00 (5.10)
④利用者理解・配慮に関する不安				
コース 1 (n=15)	33.60 (6.86)	30.00 (4.99)	24.07 (5.26)	22.00 (5.18)
コース 2 (n=19)	33.47 (6.68)	30.16 (5.94)	28.84 (5.60)	23.47 (4.12)
コース 3 (n=27)	38.96 (6.08)	32.41 (5.45)	29.07 (6.44)	24.89 (5.48)
コース 4 (n= 3)	32.33 (7.54)	30.33 (7.59)	25.00 (4.55)	20.67 (4.64)

カッコ内は標準偏差を示す。

コース 1 : 「高齢者施設→障害者施設→高齢者施設→高齢者施設」

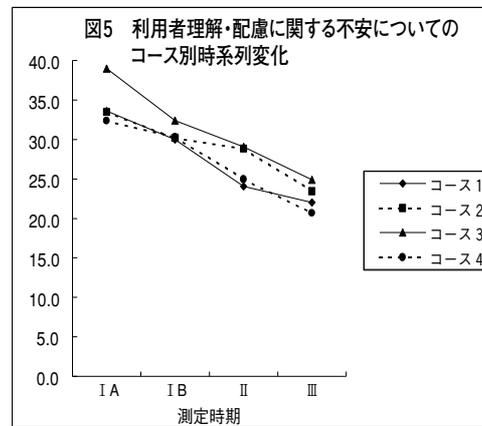
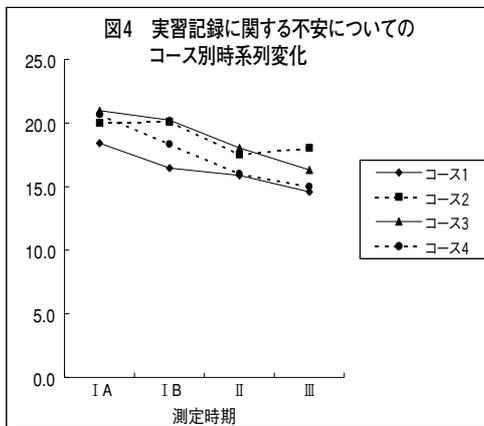
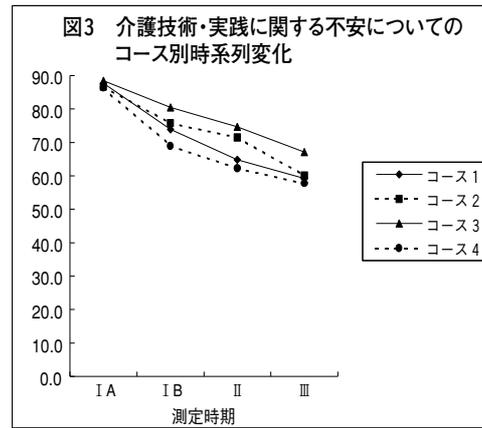
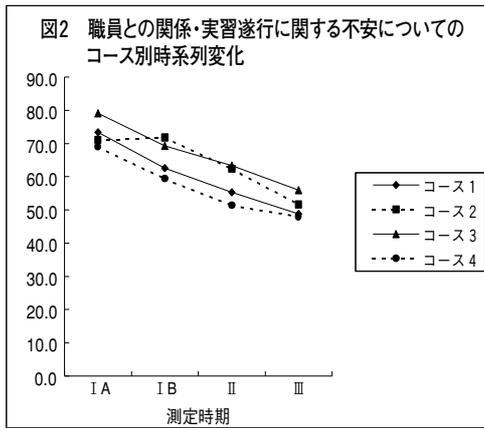
コース 2 : 「高齢者施設→障害者施設→障害者施設→障害者施設」

コース 3 : 「障害者施設→高齢者施設→高齢者施設→高齢者施設」

コース 4 : 「障害者施設→高齢者施設→障害者施設→障害者施設」

効果のみが見出された（職員との関係・実習遂行に関する不安：F [3,180] =30.42；介護技術・実践に関する不安：F [3,180] =52.07；実習記録に関する不安：F [3,180] =8.38；利用者理解・配慮に関する不安：F [3,180] =55.59、いずれも、 $p<.01$ ）。したがって、実習分野としてこういった施設を選択していくかに関わらず、既述した全体としての時系列変化の結果と同様に実習回数が増すにつれ、その実習前不安も軽減されていくという単純な漸次減少傾向を示すに留まった（各下位尺度についてLSD法による多重比較の結果は、全体での結果と同様である）。

2000年度の学生のみを調査対象とした戸澤ら<sup>10)</sup>の研究結果によれば、1回目の測定時（介護実習 I A）の時点では、障害者施設と高齢者施設で実習を行う学生との間に比較的に顕著な不安傾向の差異が認められ、障害者施設で実習を行う学生の方が高いという結果が得られていた。したがって、こうした実習分野の違いと実習回数との関連性において何ら



かの差異が見られるのではないかと予想していたが、本研究の結果によれば、その後の実習分野選択によるコースの主効果および実習回数との交互作用は残念ながら認められないようである。そこで、この4つの下位尺度について(1)で行った分析と同様に、介護実習 I B、II、IIIの時点での高齢者施設で実習を行う学生と障害者施設で実習を行う学生の不安の差異について検討してみた。その結果、実習 I Bにおける「介護技術・実践に関する不安」尺度に有意差が認められ(高齢者施設の平均30.10、障害者施設の平均33.27、 $t[62] = 2.83, p < .01$ ) 障害者施設で実習をする学生の方が高かった以外、有意差は認められなかった。すなわち、こうした実習分野による不安の差異は、初めての実習を行う介護実習 I Aについてのみ顕著であり、以後介護実習 I B、II、IIIと回数を経るにつれ、その差はほとんどなくなるといった傾向があるようであった。

#### IV. 考察

##### (1) 介護実習不安尺度の因子構造

本研究では、2000年度ならびに2001年度介護実習 I Aの被調査者の回答に基づき、柘崎ら<sup>9)</sup>による介護実習不安尺度の因子構造を明らかにした。その結果、4因子(因子1；職

員との関係・実習遂行に関する不安、因子2；介護技術・実践に関する不安、因子3；実習記録に関する不安、因子4；利用者理解・配慮に関する不安)による下位尺度を構成するに到った。柘崎らによる先行研究<sup>9)</sup>では、介護実習不安尺度を9カテゴリー(1・2年次共通の実習目標である「利用者理解」「介護技術」「記録」「チームワーク」「施設および職員の社会的役割の理解」「課題実践」と、2年次の実習目標である「介護計画の立案・実施・評価」「レクリエーションの企画・実施・評価」と、「その他」)に分類化していた。その分類と今回の研究で得られた4因子を比較すると、内容的には本学が学生に示している1・2年次共通の6カテゴリーとほぼ合致していたものの、それらは一部まとめられた結果となった。中でも、「因子1；職員との関係・実習遂行に関する不安」は、既述したカテゴリーの「チームワーク」「施設および職員の社会的役割の理解」「課題実践」がまとめられたものであるといえよう。

他方、分類が予想に反し異なった項目もあった。例えば、No.19～21の排泄物に対する抵抗感についての不安は、先行研究で介護技術のカテゴリーに入れていたものであるが、今回の結果では、「因子4；利用者理解・配慮に関する不安」に含まれた。先の研究で我々は、排泄物を目の前にしたときの対応は実践に伴う情緒的体験であることから介護技術に含まれると解釈していたが、利用者への配慮ができるかという不安としてとらえられていることが推察できる。

同様にNo.3、5、6、8、12、14といった利用者の状態を把握すること・利用者への対応に関する項目は、先の研究で「利用者理解」としていたが、被調査者には「因子2；介護技術・実践に関する不安」として捉えられていた。利用者への話しかけや相手の障害を早くつかんで不快にさせずに関わられるかという不安は、被調査者にとって利用者の理解ができているかという不安よりは、むしろ介護実践の第一歩として、自信をもって踏み出せない不安な気持ちと解釈できるだろう。

以上のような違いが一部みられたものの、期せずして、こうした因子が実習目標と合致して抽出されたことは、3か月余の学習期間ながらも学生の中に、実習で学ぶべき課題が潜在的に意識づけられていると考えられる。具体的には介護福祉実践研究(ゼミ)の授業において、常に実習の目標と連動して事前学習していたことによる影響が表れているといえよう。

## (2) 介護実習不安の時系列変化

2000年度入学生のうち計4回の調査に回答した学生の結果に基づき、(1)で得られた4下位尺度について測定時期を要因とする分散分析を行い、実習不安の時系列変化をみた。その結果、4下位尺度とも実習回数が増すごとに不安が低減していく傾向が認められた(図1参照)。

さらに、先の研究で実習 I A の測定時に実習分野別による不安傾向の差異が認められていたため、4 回の実習におけるその違いについても詳細に検討した。しかしながら、本研究の結果によれば、その後の I B、II、III における実習分野の組み合わせに関係なく、学生の実習不安は低減していくことが明らかになった。このことにより、実習分野の違いにかかわらず、学生本人の実習回数が増えるにつれて不安が低減していくことがわかった。

実習回数により不安が低減した要因については、経験の蓄積と学習段階に応じた指導の効果により、自己の理解と技量が深まり、次の実習への心構えと自信がついてきたものと概ね解釈できる。しかしその一方で、「このくらいにやっていたら何とかなる」といった実習先と教員の評価に対する慣れや、課題を遂行する上での要領のよさを身につけた精神的余裕などからくる不安の低減も否定できない。個々の学生の特性と不安の関連についても、今後吟味していかなければならないだろう。

本研究における今後の課題としては、以下のことが挙げられよう。まず1つ目は、尺度のさらなる充実化である。既述してきたように本研究では主として因子的な妥当性のみの検討にとどまったが、今後は基準関連妥当性や構成概念的妥当性など本格的な妥当性の検討が急務である。また、信頼性についても同様で、再検査法による検討も加え、尺度の有用性を明らかにしなければならないであろう。

今回の調査では介護実習 I A (実習第1段階) のデータによって4下位尺度からなる不安尺度を構成することができた。しかし、原尺度には2年次実習(実習II、III)のみを対象とする10項目(No50~59)も含まれている。よって実習II、IIIについては、その因子構造自体が若干異なっているかもしれない。また、今回の結果で明らかとなったように、実習回数が増すにしたがい不安が低減していくということは、実習不安の質的な変化も予想される。そのため、今後は実習 I B、II、III における因子構造についても検討したい。

さらに、(2)の介護実習不安の時系列変化については、調査の全体的な被調査者数が64名とやや少なく、4種類の選択コースによってサンプルにかなり偏りが生じてしまったこと、あるコース(障害者施設→高齢者施設→障害者施設→障害者施設)では非調査者数が3名と極めて少数であったことが影響していることも考えられる。今後はより大規模な集団を対象にして同様の分析を試み、安定した結果を出していく必要があると考えられよう。

介護福祉の分野における実習生の不安についての先行研究では、介護実習前・中の不安の変化およびその起因に関する研究<sup>8)</sup>およびコーピングスケールを用いた不安の認知と対処の研究<sup>1)</sup>があったが、介護実習不安の因子を抽出し、それらによる下位尺度によって時系列変化を明らかにする研究はなされてこなかった。本研究は、共栄学園短期大学の実習プログラムにおける実習生を対象にしている点で限定されたものではあるが、ここで得られた不安尺度の因子構造、時系列変化に関する知見は、今後、他校も含めた学生の実習不

安の把握と学生理解の一助になるであろう。

### 参考文献

- 1) 湯澤直美「第18章、学生の『不安』に焦点をあてた実習事前教育の試み－利用者からみた実習生の存在を素材として－」：日本社会事業大学編『社会福祉システムの展望 日本社会事業大学創立50周年記念論文集』中央法規出版、1997年、pp.367－382
- 2) 沖野良枝・徳川早知子・皆川美代子・溝口孝子・森本直美「臨床実習における学生の不安・悩みの現状と指導者・教員の関わり」滋賀県立短期大学学術雑誌第48号、1995年、pp.117－122
- 3) 長戸和子・山崎美恵子「基礎看護実習（I期）に臨む看護学生の不安に関する研究－STAYを用いて－」高知女子大学紀要（自然科学編）第46巻、1997年、pp.29－36
- 4) 豊島由樹子「学生の実習に対する不安に関する一考察」聖隷学園浜松衛生短期大学紀要第16号、1993年、pp.49－54
- 5) 浦田真紀・西本淳子・牧香里・斎藤博美・田崎敦子「ICU系実習における学生の不安－アンケート・STAYおよびTG性格検査による調査より－」第27回日本看護学会集録（看護教育）、1996年、pp.39－41
- 6) 松永彌生・金山雅子・稲垣順子・正木光代・羽嶋則子「看護学生の集中治療実習への適応－YG性格検査、STAY、不安項目からの分析－」第24回日本看護学会集録（看護教育）、1993年、pp.18－21
- 7) 青柳育子・佐竹千恵子「介護第1段階実習前教育について－学生へのアンケート調査結果より－」江戸川学園人間科学研究所研究紀要第15号、1999年、pp.37－56
- 8) 宮堀真澄・鈴木圭子「介護福祉実習における学生の不安の実態－介護福祉実習Ⅱにおける学生の不安の変化－」介護福祉学第7巻第1号、2000年、pp.117－124
- 9) 柘崎京子・弓貞子・中野いずみ・戸澤由美恵「介護実習における学生の不安（1）－実習に対する不安内容の整理と質問項目の抽出－」共栄学園短期大学研究紀要第17号、2001年、pp.109－126
- 10) 戸澤由美恵・中野いずみ・柘崎京子・弓貞子「介護実習における学生の不安（2）－初めての介護実習に臨む学生の調査結果－」共栄学園短期大学研究紀要第17号、2001年、pp.127－134
- 11) 宮堀真澄・鈴木圭子「学生の介護福祉実習に対する認識と不安と認知その対処」介護福祉教育第6巻第1号、2000年、pp.22－27

